

映画はボードレス

本が教えてくれる 人生の豊かさ

中野 理恵

冒頭の景色がとにかく素晴らしい。豊かなみどりが広がる低い山々、名称は〈チヴィテッラ・デル・トロント〉。イタリアの最も美しい村とのことなのだが、いつまでも見ていたいほど、ゆったりとして美しい。カメラが降りると目に入ってくるのは、丘の上の石造りの村。そこを〈訪ねる〉のではなく、暮らしたい思いにかられ、これから始まる映画に期待感が高まる。

初老の男性リベロは、みどりに囲まれた風光明媚なその石造りの村の広場の一角で、小さな古書店を営んでいた。隣のカフェで働く青年ニコラがしょっちゅう顔を出し、お喋りしたり手伝ったり。ほかにも初版本を探す収集家や、発禁本を借りに来る神父、ごみ箱から捨てた本を売りに来る労働者のボシャン、家政婦のキアラなどなど、さまざまな人が出入りしていた。ある日、ボシャンが持ちこんだ中から、ひとりの若い女性の日記帳を見つけたリベロは、店番をしながら、時折それを読んでいた。日付は1957年。映画は日記帳の一部を引用して進んでゆく。

—1957年2月6日、恋人のミケーレと本日、初めて結ばれた—

そんな日々を過ごしていたとき、ひとりの少年が、店先のワゴンに置いたコミックをじっと見つめているので話しかけると、その少年エシエンは6年前にブルキナファソから移民してきた、本を買うおカネがない、と言う。リベロが「読み終わったら返しにおいで」と伝えると、エシエンは『ミッキーマウス』を持って帰っていった。次に、女主人に「珍しいフォトコミックを買ってこい」と言われた、とキアラがやって来た。すかさずニコラが隣からやってきて彼女を誘うのだが、「婚約者がいる」と断られてしまう。翌日『ミッキー



©2021 ASSOCIAZIONE CULTURALE IMAGO IMAGO FILM
VIDEOPRODUZIONI

マウス』を返しに来たエシエンにリベロは別のコミックを渡す。その翌朝、リベロは病院で検査結果を知らされる。またしてもやって来たキアラにニコラはネットで取り寄せたフォトコミックを渡し、デートの約束を取り付ける。デスクで女性の日記を読み続けるミゲル。

—1957年3月3日、恋人ミケーレの職探しがうまくいかず、悩みは増すばかり—

コミックを返しに来たエシエンに「マンガは卒業。次はこれだ」と、児童書『ピノッキオの冒険』を渡す。それをエシエンが返しに来ると感想を聴き、別の解釈を伝えて別の本を与える。『イソップ物語』『星の王子さま』などなど。その都度感想を聴き、助言を与えるリベロ。エシエンの世界はさぞや広がっていったことだろう…。

ちょうど、この文章を書いているときに〈八重洲ブックセンター〉が3月末に閉店する、とのニュースが飛び込んできた。かつては町に1軒はあったであろう書店が消えてゆく。〈本のない人生〉を送るようになるかもしれない、今の若者たちの〈こころの形成〉はどうなってしまうのだろうか。

《Cinema Information》

『丘の上の本屋さん』

イタリア映画(84分)／監督：クラウディオ・ロッシ・マッシミ／3月3日(金)よりシネスイッチ銀座ほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。